

## 本棚

して続いてきたことを教えている。

「女性作曲家」と聞いて、だれの名前が頭に浮かぶだろうか。思い返せば、学校の音楽室にはベートーベンやシューベルトなどの写真が飾られていたが、そこに女性はいなかった。そして今なお、作曲は男性がするもので女性が苦手の分野という考えが支配しているといつてよい。しかし、歴史の事実は、古くから女性の音楽創造が連続と



梨の木舎発行  
A5判・248ページ  
2200円+税

著者(国立音楽大学名誉教授)はよくクラシック音楽での女性差別、男女格差を目の当たりにし、これまで一九世紀以降活躍した女性作曲家のコンサートを聞くなど、音楽史に埋もれた活動を正当に評価することに力を尽くしてきた。そこには、音楽界におけるジェンダー(性差)への根強い偏見の克服は、現在の日本社会の閉塞を打ち破る価値観の転換につながる

## 激動の時代に切り込んだ女性音楽家

っているとの思いがある。ショパンのマスルカをいくつも編曲し、

本書はなかでも、フランスの音楽家(オペラ歌手)で作曲家、ピアノ演奏家でもあったポリリーヌ・ガルシヤリヴィアルドと多くの芸術家を魅了した生涯に光をあてることだ。ロシアの文学者ツルゲーネフとの協働作業や傑出した音楽家と評価されるべきその生涯を浮かび上げさせている。ポリリーヌに関するこれまでの

の顕彰活動を踏まえて内外の歴史資料、数少ない研究者の論文を集め、多家や作曲指導に力を尽くすの図版を引用して構成された本書は、その意味で著者のライフワークの集大成をなすものである。独自のスペインの民俗性をもとにイタリ

アの古典音楽、ロシアの文学・音楽への造詣が深く、ドイツ語を含めて数カ国語を操り、国境をこえた文化交流の魔手的な存在であった。だが本書を通じて強

印象づけられるのは、当時の男性社会に属することなく広い視野から心の

真実を表現し、激動の時代の中心に切り込んだ芸術精神の気高さである。

ポリリーヌが一八四八年、七月王政を打倒して半世紀ぶりに共和制を宣言した二百革命を祝って上演されたカンタータ「新しい共和国」を作曲したことは、そのことを端的に示すものだ。その歌詞には、

「恥められた哀れな僕たちよ／＼水に閉ざられていた薔薇のよう、／共和国はあなたがたを救い出す、／おお、勝つてくれた娘たち／屈したちはあなた方を救むだろう／おお、共和国、われらが母よ／私達に与えら

れるごとく／その響きを民衆すべてに与えられよ」

という二節がある。著者は今以上に女性を人間的としてあつかっていた時代はフェミニズム

の狼煙をあげ、「民衆」の狼煙をあげ、民衆への利用し厚くされ、あけくうとしたこの音楽の強さを強調してやまな

い。著者はフェミニズムとは、男を貶めて女の権利を声高に叫ぶことではなく、また「女だけの問題ではない」ことを、

ポリリーヌが体現した意動を通して説いている。それは、人間として生きてこないのではないか、きもうえて性的な根拠的と善者は問いかける。そ

として扱われず道義と見下された「弱きもの」が既成の権威から解放され、本来の力と強さをとり戻し自由活動できるよう要求することである。その目標は、「支配社会によって尊重され、利用し厚くされ、あけくうとしたこの音楽の強さを強調してやまな

世界はすべて」だとのべたジェンダー差別を見直す事にもヘッジを削いている。過去に日本でポリリーヌを詳しく紹介したのが森岡外であったことや、ポリリーヌのパン

トマイム「日本にて」について、当時のジャポニスムを背景に論じている。ことごとあわせて興味深い。

（梨の木書行、A5判・二四八ページ、二二〇円十税）

（一）